

ISSN 1342-5935

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No.48

ある「広島原爆早期入市者」の 記録

川野 徳幸
今中 哲二
編



March, 2013

広島大学平和科学センター
730-0053 広島市中区東千田町1-1-89
TEL: 082-542-6975
FAX: 082-245-0585
E_mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.sc.jp/heiwa/>

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No.48

ある「広島原爆早期入市者」の 記録

川野 徳幸

(広島大学平和科学研究センター)

今中 哲二

(平和科学研究センター客員研究員

京都大学原子炉実験所)

編

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
栗原 明子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
佐々木 陸子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51

はじめに

本報告書は、広島原爆早期入市者である栗原明子さんと佐々木陸子さんを対象としたインタビューの記録である。ご両氏とも広島で原爆被災され、早期に入市されている。

周知のように、広島・長崎の残留放射能による入市被爆者への被曝影響については、さまざまな見解があり、日本各地で行われている原爆症認定訴訟での争点のひとつにもなっている。そういった中、2008年8月6日に、「見過ごされた被爆～残留放射線・63年後の真実～」というNHKスペシャルが放映された。そこでは、入市後に体調を崩した人の証言や、入市者の急性放射線障害を示唆するABCC（「原爆傷害調査委員会」、現在の「放射線影響研究所」）の調査票（医療記録）などが紹介された。その番組に登場されたのが、栗原・佐々木のご両氏であった。

その頃、今中は、マイクロソフト Excel を使って、入市の時刻と距離の情報を入れれば、誘導放射線量外部被曝を計算する簡易ソフトを作成していた。その Excel ソフトを用い、お二人の早期入市情報をデータとし被曝量を算定しようと考えた。同時に、新たに見つかった ABCC 調査票を援用しながら、入市被爆の問題を再検討しようと思った。これが、両氏と対象とした聞き取り調査をはじめたきっかけであった。

編者らは、上記 NHK スペシャル担当ディレクター・松丸慶太氏の紹介で、2008年4月、6月にそれぞれ栗原さん、佐々木さんに面談し、入市の経路を中心に聞き取りを行った。そこで得られた情報に基づき被曝線量を算出し、同じく入市被爆者であった今中の母の事例を加え、早期入市被曝量の評価を行った。その結果は、2009年11月開催の日本放射線影響学会第52回大会と2012年2月開催の第46回京都大学原子炉実験所学術講演会において、それぞれ報告した。¹なお、

¹ 第46回京都大学原子炉実験所学術講演会報文集（2012年1月）。なお、同内容は、今中哲二（2012）『低線量放射線被曝』岩波書店、にも所収されている。

報告内容については、巻末資料として付した。

このように、当初は、早期入市者の被曝量を測るために実施した聞き取りであった。しかしながら、今中らは聞き取りを行う過程で、ご両氏の話の中に早期入市者として貴重な体験が多く盛り込まれていることに気づいた。そこで、編者らは、日をあらためてインタビューを行うこととした。その結果、実現したのが、2009年12月5日実施の本インタビューである。

早期入市者・入市被爆者の生の声を記録として残しておくということは、ことさらに重要である。入市被爆者は、直接被爆者に比べ相対的に体験を語ることが少ない。しかし、川野らが指摘するように、入市被爆者の見た原爆投下後の「原風景」は、直接被爆者の見たそれとは異なる部分がある。入市被爆者の場合、原爆投下後、時間の経過を経て入市した分、爆心地付近の情景を直接被爆者とは違った視点でつぶさに見ている。このことは、入市被爆者の原爆体験もまた原爆被害理解の深化のためには不可欠なことを示唆している。²この意味でも、直接被爆者の記録同様、早期入市者・入市被爆者の記録もまた重要なのである。

入市被爆者においても、発熱、下痢、脱毛といった急性放射線障害のような症状があったことは間違いない。ただ、今中の計算を含め、従来の誘導放射線量推定値では、そうした症状は説明しがたい。そこで、それらが被曝影響かどうかについては、様々な解釈がなされているのである。例えば、次のようなものである。

- * 放射線被曝とは関係ない（赤痢、チフスといった）病気である。
- * 被曝量の推定が間違っている。例えば、内部被曝量が極めて大きかったのに無視されている。
- * 被爆体験という極限的な状況下では、少量の放射線被曝が他の要因と複合的に作用して急性放射線障害のような症状をもたらす。

² 川野徳幸、佐藤健一、原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被曝区分別特徴について、『広島医学』、65巻4号、322-326、2012年

编者らの入市被爆者における被曝線量算出の試みは、この問題に答えを出そうとするものではなく、問題を考えるための客観的な材料を、批判に耐える形でまとめたという意識に基づいている。と同時に、仮にチフスによるものであったとしても、それらが原爆災害という混乱の中で発生したものであるなら、「原爆が原因」と考えるべきであることも指摘しておきたい。

原爆投下から 67 年が経過した。原爆投下以後今日まで医科学、放射線物理学、人文社会学の各領域において、原爆被爆被害に関する調査研究は実に貪欲に行われてきた。しかしながら、いまだもって原爆被害の全貌が解明されたわけではない。今日的な問題でいえば、たとえば、原子爆弾被爆未指定地域における放射性降下物による被曝影響の問題、いわゆる「黒い雨」の問題は未解決のままである。また、原爆放射線による発癌の分子生物学的な発症メカニズムも研究の途上であるし、被爆者の精神的被害・影響の全貌も解明されているわけではない。そもそも 1945 年 12 月末までの死没者「14 万人±1 万」という数さえも議論の余地を残している。原爆被害の全体像により接近することは、次世代のわれわれの責任であろうし、使命であろう。そのためにも本報告書のような「生の声」は不可欠である。そういった思いを込めて、本報告書を送り出したい。

末尾になりましたが、栗原明子さんと佐々木陸子さんに対し、諸般の事情で発行が遅れたことをお詫びいたしますと共に、今後のお二人のご健康を切に願っております。

編 者

川野 徳幸

今中 哲二

2013 年 3 月 13 日

栗原明子氏オーラル・ヒストリー

2009年12月5日実施

○川野 まず8月6日以後、入市までの状況をまとめておりますので確認させていただきます。

1926年5月5日生まれ、原爆投下時19歳でいらっしゃった。広島女学院専門部2年保健科に在籍。当時、お父さまは広島県立病院に眼科医として勤務されており、お父さまとお二人で大手町に住んでおられた。当時、お母さまと妹さんは安佐郡の久地村に疎開中でいらっしゃった。

8月6日当日は向洋の東洋工業、現在のマツダに動員されておられた。そして被爆後、臨時的救護所となった東洋工業だけが人の収容・看護にあられる。6日の夕方には自宅を目指し、二葉の里まで行かれた。しかし、その先は火の海で入れなかったというお話でした。

それで結局、再び東洋工業に戻られた。8月7日早朝に、再度大手町の自宅のほうへ向かわれた。その後は日赤病院にお父さまを探しに行かれますが、結局、お父さまに出会うことはできず、途方に暮れる。しかし、文理科大学の正門の前で一級上の上級生とお会いになって、そこから野宿生活を始められるということでしたね。

以上のことは、手記『十九歳の夏』に詳しくお書きになられていますので、しっかり読ませていただきました。それでは、その後のお話をいろいろお聞きしたいと思います。いまの説明で何か誤り、もしくは補足しておきたいようなことがございましたらおっしゃってください。

○栗原 東洋工業は8月7日の午前4時頃に出たので、広島駅に着いたのは、もう少し早かったかなと思うのです。東洋工業のあたりから広島駅まで歩いてどのぐらいの時間がかかりますかね¹。

○今中 結構距離があるのではないですか。途中の道はどうでしたか。あちこちひっくり返ったりしていましたか。

¹ 東洋工業は現在のマツダ。広島駅までの距離は、直線にして約3.2km。なお、脚注はすべて編者による。以下同。

- 栗原 ええ、していました。まだ燃えている所もありました。
- 川野 何か移動するのに障害になるような物がたくさんありましたか。逆に焼けてしまって移動が困難になっていたりしましたか。
- 栗原 もう死体をまたいだり、けが人がいっぱいいたりしました。
- 今中 まあ広島駅まで移動するのに2、3時間はかかるでしょうね。
- 川野 それは7日の朝のことですね。
- 栗原 はい。
- 川野 『十九歳の夏』に書かれていましたが、東洋工業を朝方出て、結局広島市内に着いたのは夕刻だったということですね。
- 栗原 そうですね。
- 川野 いまではちょっと考えられないような、長い時間をかけて歩いたということですね。
- 栗原 はい。
- 川野 『十九歳の夏』にも書かれていたし、その後の『AERA』の取材にも答えておられましたが、入市後の野宿生活についてお聞かせください。『十九歳の夏』には、入市後、当時の広島文理科大学（広島市東千田町）で野宿し、お父さまを捜された様子、またそこで出会った南方特別留学生との交流が描かれています。その時の生活の様子を詳しく教えていただければと思います。
- 栗原 野宿生活は留学生が8人ぐらいでした。それから、日本人では佐々木さんと佐々木さんのお母さんと、私と私の母と、留学生が泊まっていた興南寮のおばあさんやお母さんたち、総勢十何人になりますかね。一緒に野宿したんです。
- それで夜になると、広大の小学校の跡も火で真っ赤になって。
- 川野 ずっと火がくすぶっていましたか。
- 栗原 そうです。それで死体を集めて焼く火がよく見えて、臭いもしました。
- 川野 あちらこちらで死体が焼かれていましたか。
- 栗原 あちらこちらで集めて焼いていました。
- 川野 食事はどうされていましたか。
- 栗原 食事は、初めは広大の校庭にサツマイモが植えてあったので、まだ食

べるには小さかったのですが、それを掘って鉄かぶとでゆでて食べたり、市役所で何か配っているよ、と聞いたらそこへ並びに行ったりして食料を手に入れていました。

○川野 市役所に行けば、食料は手に入れることができましたか。

○栗原 乾パンとかを手に入れることができました。

○今中 家を掘られた、と手記にお書きになっていましたよね。

○栗原 防空壕を掘りに行ったんです。私の家が大手町 7 丁目にあつて、ちょうど爆心地から 900 メートルぐらいですかね。防空壕を掘りに行ったんですけど、入っていた物はみんな溶けたり真っ黒になっていました。

○川野 防空壕に入っていた缶詰も全部真っ黒だった、というようなことを取材でもおっしゃっていましたね。

○栗原 真っ黒でした。

○川野 原爆投下から 3 日間はお芋とかを掘って生活されていて、食料が尽きたので大手町のほうに帰られた。その後、実際に防空壕を掘ったりして、食料を探しに行かれたけれども、食べられるものはなかったということですね。その後食料はどうされましたか。

○栗原 その後はいろいろ差し入れもあつたんですね。留学生の友達とか広大の先生からの差し入れです。それから牛田のほうの留学生で、私のことを知っていらっしやる方々がいろいろ食料を持ってきてくださったりしました。

○川野 そうですか。

○栗原 でも、それでも十分にはなかつたですけどね。

○川野 夜はどうされていましたか。

○栗原 夜は草原で寝ていました。

○川野 そういった食事をされながら寝泊まりをして、ずっとお父さまを捜されるわけですね。非常に切羽詰まった感情で行かれて、いろいろな場所を回られたのだと思うのですが、その時に見た広島風景で、いまでも忘れられないものがありますか。

○栗原 そうですね。全部忘れられないですけど、收容されている人が何も手当をされなくて、もうハエがいっぱいたかつて、ウジがわいて、ウジが傷口の

ほうをはっているんですよ。そういうのも思い出してしまいます。それから臭いですね。傷の臭いか、やけどの臭いか、その臭気はいまでも思い出しますね。

また、あの当時は水をあげてはいけないというのがありました。

○川野 そうなんですよ。いろいろな手記を読むと、当時は水をあげたら亡くなってしまう、というような話がありましたよね。

○栗原 そうなんです。いま思えば流言飛語ですか。そういうのは怖いものだなと思っています。

○川野 そうですね。あの流言飛語の出どころというのは、よく分からないんですよ。

○栗原 分からないですね。もっとお水をあげればよかったと思っています。

○川野 被爆者の多くの方々、あの時、水をあげなかったことを後悔の一つとして挙げられる方が非常に多いですね。

○栗原 ええ、私も水をあげなかった。

○川野 先ほどおっしゃったような収容所にいた方々の死体の様子であるとか、そういったことを夢の中で見たり、思い出したりすることはありますか。

○栗原 その当時はよく思い出していましたが、いまではちょっと思い出すことは少なくなりました。投下から 64 年たっていますから。

○川野 どういうときに思い出されましたか。

○栗原 そうですね。思い出すのは、自分が病気した時などです。ああいう収容所にいた人たちのほうがもっと苦しかったんだろうなと思いますね。

○川野 次は、先ほど今中先生がお見せになられた ABCC の調査票²についてのお話をお聞きいたします。この調査票にも『十九歳の夏』にも書かれていますけれども、被爆後 3 日目あたり、ちょうど文理科大学で野宿をされている最中に、喉の痛み、発熱のような症状があったということですね。その時の様子を、思い出せる範囲で教えていただきたいのですが。

○栗原 喉が痛かったから風邪をひいたのかなぐらいに思っていました。その

² 巻末資料参照。

当時は、まだ放射能が原因ということも知らないですから、野宿をして風邪でもひいたのかなと思っていました。

○川野 発熱があったかもしれないというようなことを『十九歳の夏』にも書かれていましたね。

○栗原 ええ、自分で熱があるなと思いました。

○川野 お父さまをずっと捜していらっしゃったわけですから、気も張っていたと思うんですよね。そういった気持ちが栗原さんの背中を押して、市内中、足を棒にして捜されたのだろうと思います。そして、お母さまが原爆投下から3日目ぐらいに合流された。

○栗原 そうです。

○川野 その時、お母さまを見てどう思われましたか。

○栗原 母のことは忘れていました（笑）。父のことを捜すのに一生懸命で、母のことは全然忘れていたんです。それで母が来たのでびっくりしました。母は母で何の連絡もないし、私は、もうたぶん両親二人とも亡くなっているだろうなと思っていました。

○川野 大手町のご実家でちょうどお母さまと会われたということですね。先ほどのお話だと食料を探しに行かれていた時ということでしょうか。

○栗原 そうなんです。防空壕を掘っていた時に母と会ったんです。

○川野 お母さまは8月9日ぐらいに入市されたわけですか。

○栗原 そうです。

○川野 その後、お母さまとずっと一緒に生活されたということですね。

○栗原 はい。

○川野 お母さまは発熱とか、そういった症状はありましたか。

○栗原 母はそういうことはなかったようです。

○川野 分かりました。その後、8月14日に久地村のほうに、もう一度疎開されるということでしたね。久地村にはご親戚がいらっしゃったのですか。

○栗原 いえ、親戚でも何でもありません。お寺のちょっと知った方があって、そこへ妹が疎開していましたので母と一緒にいったんです。

○川野 そしてその後、栗原さんは発熱・血便が続くということですね。こち

らの調査票にあるとおりですが、強いだるさ、倦怠感を感じられた。そして意識もうろうといった状態が続いたんですね。

○栗原 はい。

○川野 疎開から 2 週間ぐらいして解熱し始めるが、同時に脱毛が始まるということですね。

○栗原 はい。

○川野 ということは、脱毛を経験されるのは被爆から 1 カ月後ということでしょうか。

○栗原 はい。

○川野 脱毛と同時に口の中が糜爛（びらん）して、唇にも潰瘍ができて悩まされるということですね。

○栗原 はい。

○今中 脱毛はどんな感じでしたか。覚えておられますか。

○栗原 そうですね。朝に髪をとくと、くしにいっぱいついて落ちるような感じですね。髪の毛全体の 3 分の 1 ぐらいが抜けたのではないかと思うんですけど。

○今中 調査票では、脱毛は髪全体の 30%から 35%になっていますね。

○川野 その脱毛は、どのぐらい続きましたか。

○栗原 どのぐらい続きましたかね。よく覚えていないですけど。

○川野 毎朝くしを入れられると抜けてしまうということでしたが。

○栗原 ええ、くしを入れると、もうバサッというぐらい髪の毛が抜け落ちました。

○川野 それはショックなことですよ。驚かれましたよね。

○栗原 ええ。

○川野 この脱毛の原因は何だと思われましたか。

○栗原 何か分かりませんでした。

○川野 下痢であるとか、意識がもうろうといったような状態、もしくは発熱、さらには髪の毛が抜けていく。そういった症状は何だろう、というふうに考えられましたか。

○栗原 その当時は、原爆は新型爆弾と言っていたので、この新型爆弾によるものかなとは思ったのですが。

○川野 そういう新型爆弾だという話をどなたかから聞かれたんですか。それとも、ご自分でそういうふうに使われたんですか。

○栗原 その当時、そういう話をみんなしていました。

○川野 でも当時、赤痢ではないかと言われたと書かれていますね。

○栗原 そう。私は赤痢じゃないかと思ったけど、違うのではないかなと思ったりしました。

○川野 それで病院のほうには行かれたんですか。

○栗原 いえ、病院の先生なんかいないんです。

○川野 それはそうですよね。広島市内のほとんどの医師は、働ける状態ではありませんでしたので。

○栗原 ええ。ですから、そのまま病院には行かずに、何かニンニクがいいというのでニンニクをたくさん食べさせられました。

○川野 それはお母さまがどこかからニンニクを手に入れられて、食べられたということですか。

○栗原 はい。

○川野 先ほどおっしゃったような意識もうろうという状態がしばらく続いて、放射線の影響というのは、あまりよくお分かりにならなかったというようなことをおっしゃっていましたね。

○栗原 分かりませんでした。

○川野 いつ頃、放射線の影響だというようなことを考え始められましたか。

○栗原 だいぶ経ってからですね。新型爆弾で放射能があるんじゃないかというような、またそれもうわさ話ですか、何かいろいろとうわさを聞いてからです。

○今中 毒ガスだと言う話は聞かれませんでしたか。

○栗原 初めは広島毒ガス施設がありますね。あれが爆発したんじゃないかという話は聞いたんです。それからだんだん、それも違うようだということになって。

- 川野 そういったうわさというのは、至るところで聞くものですか。
- 栗原 はい。ああいう話というのは、すごく早く伝わるものですね。
- 川野 そうですね。それは占領下時代の話ですね。1952年ぐらいまでの話ですか。
- 栗原 そうですね。
- 川野 それで赤痢ではないかというようなことを言われたと、『十九歳の夏』の中に書かれてありましたけれども、当時、赤痢というのは多かったですか。
- 栗原 赤痢とか疫痢とかは、当時は多かったですね。
- 川野 それは赤痢じゃないかという医師の判断があったわけではないですよね。
- 栗原 そうです。自分の判断です。
- 川野 ただ下痢とか、そういったことは赤痢でも十二分に起こるんでしょうけれども、脱毛というのは赤痢にはない症状ですよ。
- 今中 はい、脱毛と歯茎の出血は赤痢にはないですね。
- 川野 ええ、なかなかそういった症状は考えにくいですよ。
- 栗原 口の下の周りから全部膿んで、ほっぺたの周り、中のほうから全部膿んで、ここらも全部膿んで。
- 川野 ずっと歯茎から出血していましたか。
- 栗原 はい。
- 川野 免疫力がなかったんですね。歯茎は痛かったですか。
- 栗原 痛かったですよ。何も食べられない状態でした。ちょっと水気のことを少し飲むぐらいで食事を済ませていました。
- 川野 久地村のお寺のほうで療養されて、そういった下痢や歯茎の出血の症状が回復し始めるのはいつ頃ですか。いつ頃床上げされましたか。
- 栗原 床上げするのに1カ月半ぐらいかかりました。体はすごくだるかったんですよ。それでお寺ですから、泊まっている人はみんな、お寺の廊下なんかをふかなきゃいけないんですが、それは体がだるくて大変でした。
- 川野 栗原さん以外に、栗原さんのように、そのお寺に疎開されている方はいらっしゃるんですか。

- 栗原 はい。
- 川野 それで 1 カ月ぐらい後に床上げされて、その後、体調はいかがでしたか。
- 栗原 体調はだんだんとは元気になってきましたね。
- 川野 その後、下痢とか血便とか脱毛というのはなかったですか。
- 栗原 そういう症状はなかったです。
- 川野 髪の毛は抜けて、また元のように生えてきましたか。
- 栗原 少しずつ生えてきました。その当時は脱毛のせいで坊主になった人もあるし。だから私なんかはいいほうだったんですよ。
- 川野 そういう症状の方はたくさん見られましたか。
- 栗原 はい。友達にもいました。
- 川野 その友達というのは、やはり栗原さんと同じように、投下後、入市された方ですか。
- 栗原 いえ、直接に被爆された方です。
- 川野 入市被爆の方々で、そういった症状が出たという話を聞かれたことはありましたか。
- 栗原 ありましたね。
- 川野 救護とか介護とかをされた方ですか。
- 栗原 ええ。救護活動をして、やはりこういう症状が出たという人もありました。
- 川野 そうですか。
- 栗原 脱毛の症状は聞かなかったんですけど、下痢とか熱が出たとか、そういうのは聞きました。
- 川野 脱毛したんだという話を聞かれたことはありますか。
- 栗原 脱毛したというのは、あまり聞いたことはないのです。彼らとはあまり戦後会っていないものですから。みんな、いろいろな症状などのことを言わないようにしていたから。放射能があるということで嫌われて、すぐそばに行くと放射能がうつるとかいうのは聞きましたけどね。
- 川野 ご自身は、そういう放射能がうつるというふうに言われたことはあり

ますか。

○栗原 言われたことはありますね。一緒にいないほうがいいとか。だから、みんな被爆のことは隠していましたね。

○川野 そのように言われたのは、いつ頃ですか。

○栗原 被爆から半年ぐらい経ってからですかね。

○川野 下痢や脱毛が放射線の影響だと分かったのは、半年くらい経ってからですか。

○栗原 ええ、そのころは放射線の影響だろうねというのは、みんな言っていました。市内に入って、亡くなった人を探しに行行って帰ってきたら、その方も亡くなられたというので、たぶん放射線の影響だろうというのは言っていましたね。

○今中 そんなことがあったから、周囲の人から放射能がうつると言われる。

○川野 そう言われるでしょうね。そういった差別の事例はたくさんあるんですが、それをもう少し集約して、いつか体系的に議論できるのではないかと思うんです。

○栗原 それで結婚も、放射線に遭っている人と結婚すると異常児が産まれるとか何とか言っていました。でも、私なんか主人も被爆者なので、子どもが産まれる時は心配しました。でも、無事に生まれた子どもには何もなかったですから。

○川野 実際、そういうふうに障害を持って生まれた子どもの親御さんとお会いになったことはありますか。

○栗原 いや、それはないですね。

○川野 そういった子どもに障害が出るという話を、よく耳にしていたということなんですね。

○栗原 ええ、耳にはしました。

○川野 では、少し話を進めまして、戦後 ABCC の計算機のキーパンチャーで勤務されておられましたね。勤務に至る経緯を、まず教えていただければと思います。

○栗原 それは学校のほうから推薦が来たんです。

- 川野 女学院のほうですか。
- 栗原 はい。
- 川野 ABCC に勤務され始めたのは何年ごろですか。
- 栗原 昭和 23 年ぐらいです。広島に ABCC ができた年に入ったんですから。
- 今中 最初、玉垣秀也さんが言っていたけど、日赤に間借りをしていたそうですね。その頃から勤務していたんですか。
- 栗原 そう。宇品の凱旋館で事務を執っていたんです。
- 今中 ああ、その頃からですか。
- 栗原 はい。
- 今中 では、ABCC ができた一番最初のほうですね。
- 川野 女学院なら英語教育がしっかりしているし、その英語が役立てるからというような話だったのですか。
- 栗原 それはなかったと思うんですが、女学院から何人か ABCC へ行きました。
- 川野 そうですか。
- 今中 昭和 23 年に、ABCC にはもうコンピュータがあったんですか。
- 栗原 いえ、その頃はまだコンピュータはないです。ABCC が比治山に行ってから導入されました。
- 川野 それで、いつまで ABCC に勤務されたんでしょうか。
- 栗原 昭和 44 年だったと思います。
- 今中 ずいぶん勤務されたんですね。
- 栗原 そうです。21 年ぐらいいました。
- 今中 何か玉垣先生の話を知っていたら、ABCC は結構楽しかったようなことを言っていました。
- 栗原 最初は 3 時が仕事をやめる時間で、土曜日が休みでした。そのころ土曜日が休みなんてなかったですし、3 時に仕事をやめるなんてないですもんね。
- 川野 玉垣先生の手記を読むと、非常に和気あいあいとしていて、日系二世、アメリカ人との交流があったようですね。
- 栗原 彼らからはいろいろな物をもらいました。

○川野 そういう交流が非常に楽しかった、そしていまも続いているという話でしたね。

○今中 僕は ABCC でちょっと気になったことがあって調べたんですが、最初は所長さんなんていうのは軍関係者なんですよ。

○栗原 そうですね。

○今中 軍関係だから、おっかなびつくりの怖いのばかりかと思ったけど、玉垣さんはドクターだったせいもあるのか、結構気楽に楽しんで、暇があったらビールを飲んでいたとか言っていたから。

○川野 玉垣先生の周りにいたのはだいたい医師で、プリンストンかイエールか、どちらかの出身の医師が赴任してきたということでしたね。

○栗原 それで、調査しに行くという話が出た時に、私が「後から広島に入って亡くなった人がいるので、二次放射能というのがあるのでしょうか。」とジェームス・ニール先生に聞いたら、すごく怒って、「そんなことは絶対にない。」と言われました。

○川野 それでも ABCC にはこういった調査票が残っていますよね。

○栗原 私は、これはよく覚えていないんですけどね。

○今中 1954年3月29日です。

○川野 昭和29年ですね。これは、あまり覚えていないとおっしゃっていましたが、では当然、調べてみないかというような話があったというようなことも、あまり記憶されていないのですか。

○栗原 ええ、記憶していないんですよ。いつ、こんなのを調べられたのかなと思って。

○川野 何か ABCC の中で、ご自身の体験を話されて、関係者が調べてみようという話になったんですかね。

○栗原 たぶん、なったんですね。調査があったのは覚えているんですけど。

○川野 これを見る限りにおいて調査は1回きりということですね。

○栗原 おそらく1回ですね。

○川野 その時の調査結果についての報告を受けましたか。

○栗原 いえ、報告は受けていません。

- 川野 この ABCC 調査票の存在について、いつお知りになったんですか。
- 栗原 この間、今中先生が来られたとき³に知りました。
- 今中 松丸さんがいろいろ放送で使う資料を調べている中に、ウッドベリーさんという ABCC の方が書いたレポートがあるのですが、その中に栗原さんの医療記録が引用されていたんです。
- 栗原 なぜ私の調査票が載っているのかなと思って。許可も無く、なんて思いました。
- 今中 いまだったら問題ですけどね。
- 川野 よくよく考えれば、あまり栗原さんにとっては記憶に残らないほどの問診だったんですかね。
- 栗原 そう思いますね。
- 今中 そうだと思います。丁寧じゃないですよ。普通だったら、血を採って血液検査をしたり、そういう記録があるんだけど、栗原さんは聞き取りだけでしたね。
- 栗原 被爆者の方をランダムに選んで調査をなさったから、その中に私は入らなかったんですね。
- 今中 栗原さんの調査票が出ている英語のレポートは、ABCC の人が 1953 年頃に書いたものですけど、その中に、うちの職員でこんな人がいるよ、というので引用されていたんですよ。
- 栗原 そうですか。
- 川野 二次放射能についてニール先生にえらく怒られたという話でしたね。
- 栗原 ええ、「二次被爆があるんじゃないか」って聞いたらしかられました。
- 今中 だから ABCC の当時の公式見解としては、二次被爆は大したことがないという見解を採ったんでしょうね。
- 川野 そうでしょうね。

次に、被爆後の健康状態と、現在の健康状態についてお伺いします。被爆後、何か大きな病気をされたようなことはありましたか。

³ 2008 年 4 月。

- 栗原 大きな病気はいろいろあります。貧血で ABCC に 2 週間ほど入院しました。
- 川野 それはいつ頃ですか。
- 栗原 昭和 32 年です。あとは普通の骨折とか、腰椎の手術とかです。
- 川野 その後、貧血はいかがですか。
- 栗原 貧血は、もう治っています。ただ、毎年 1 回は原爆の検診に行くんですけど、この間の 10 月には軽度の肺癌が認められたから注意するようにと診断されました。でも自分では何ともないから気にしていません。
- 今中 でも早く、もっときちんと検査してもらったほうがいいですよ。
- 栗原 そうですか。
- 今中 肺癌は症状としては痛くもかゆくもないといわれますが。
- 栗原 そうらしいですね。
- 今中 治療は早ければ早いほどいいらしいですから。
- 川野 そういった被爆後の貧血というのは、やはり入市されて 1 週間、文理科大学にいながら、お父さまを捜された際の二次被爆による影響だというふうに思われていますか。
- 栗原 いえ、あまり思いませんでした。
- 川野 当時は思わなかったということですか。
- 栗原 はい、当時は。
- 川野 いまは二次被爆の影響だと思われませんか。
- 栗原 いまはそうかなとったりもします。
- 川野 分かりました。話が飛びますが、亡くなられたご主人も入市被爆者でいらっしやったということですね。
- 栗原 そうなんです。
- 川野 どこでご主人と出会われたんですか。
- 栗原 東洋工業で一緒だったみたいです。私は彼がいたことを知らないんですけどね。それで、主人は原爆投下の日に相生橋付近まで行ったんです。あのへんで外人の人が死んでいたとか言っていました。
- 川野 では、東洋工業で一緒だったことが契機で、ご主人と結婚されたとい

うわけでもないんですね。

○栗原 はい。私はそれからお寺を出て、五日市のほうへ移ったんです。その時はまだ主人のことを知らないですけど、主人はアルバイトで荷物を大人車に積んで押していて、坂道だったから、私も押してあげたんですね。それがきっかけでした（笑）。

○川野 それは藤沢周平の世界みたいですね（笑）。

○一同 ははは（笑）。

○栗原 それが主人との最初の出会いです。彼に昔のことを聞いてみると、私は大手町小学校に行っていたんですけど、主人も大手町小学校にちょっと行っていたと聞きました。

○川野 先ほど結婚時の差別とか、そういったことがあるというお話でしたが、お二人とも入市被爆者でいらっしゃいましたよね。ご家族の反対とかそういったことはありましたか。

○栗原 それはなかったですね。

○川野 周囲から何か言われたようなこともなかったですか。

○栗原 それもなかったですね。

○川野 もし栗原さんが被爆者ではない方と結婚するというのであれば、当時はなかなか大変でしたかね。

○栗原 そうかも分かりません。

○川野 被爆者同士の結婚というのは、案外障害はなかったというのはよく聞くのですが、どうですか。

○栗原 ええ、そうですね。

○川野 それでご結婚されて、お嬢さまがお生まれになられた。

○栗原 はい。

○川野 お子さまはお一人ですか。

○栗原 はい、女の子が一人です。

○川野 いま、お嬢さまはどうされていらっしゃいますか。

○栗原 いまは結婚して府中のほうにいます。

○川野 次にお聞きするのはかなり大きな質問で、なかなかお答えしにくいの

ではないかなと思うのですが、原爆、もしくは入市された、お父さまをずっと捜されて回られた、そういうことで非常に自分の人生が大きく狂わされたというような思いがおりますか。

○栗原 それはありますね。

○川野 どういったことで一番そういうふうに使われますか。

○栗原 原爆までは父が医者だったので、いま考えてみればぜいたくな生活ですね。それがいっぺんに、もう父がいなくなったので、間借りしたり、あちこち転居して、海岸に行って流木を拾ってきて、それを乾かして煮炊きに用いたり。だから生活がいっぺんに変わりましたね。

○川野 その後、大手町のご自宅はどうされたんですか。

○栗原 その後自宅はどうなったのか、私は分からないですよ。

○川野 やはりお父さまが亡くなられたというのが一番大きいことですよ。

○栗原 そうですね。生活が全然違ってきましたから。貧乏のどん底に落ちたというか。

○川野 その後、お母さまが家計を全部賄われたんですか。

○栗原 そうですね。私もアルバイトみたいなことをして、お金を少し家に入れたりしていました。その頃は、妹と3人での生活でした。

○川野 妹さんは中学生ぐらいですよ。

○栗原 ええ、中学だったんですけど、だんだん空襲警報のサイレンでノイローゼみたいになって、疎開させたほうがいいねということで、疎開させました。

○川野 それはお父さまの判断ですか。

○栗原 はい。

○川野 では、原爆に遭わなければ、もっと違った人生があったというふうにお考えになりますか。

○栗原 そうですね、そう思います。

○川野 その一番の大きなことというのは、お父さまが亡くなられたということですか。

○栗原 そうですね。

○川野 生活は一変されましたか。

○栗原 もう一変ですよ。着る物もないですからね。五日市にいた時も、ご近所の方にお茶碗とかお皿とかみんな分けていただきました。

○川野 お父さまのご出身は広島だったんですか。

○栗原 いいえ、東京です。東京大学出身でした。

○川野 それで広島に来られたということですか。

○栗原 ええ。

○川野 では、べつに広島に縁故があったわけではないんですね。

○栗原 縁故があったわけではないんですが、聞くとおとよりますと、岡山のほうの知った方が広島に行ってくれないかということで、父は広島に来ただそうです。

○川野 そうですか。では、お父さまが亡くなってから、お母さまは外で働かされていたんですか。

○栗原 そうですね。私も働いていました。

○川野 そして妹さんを養っていたということですね。

○栗原 ええ、学校に行かせて。私もまだ学校が 1 年残っていましたから、きちんと卒業させてもらいました。

○川野 妹さんはその後どうされたんですか。

○栗原 姉の嫁ぎ先である新潟へ行きました。

○川野 ああ、お姉さんがいらっしやっただんですね。

○栗原 はい。その姉が妹を引き取ってくれて、妹は姉のところまで高等学校まで行きました。それから妹は広島に帰ってきたんですけど。だから、妹が新潟に行ってから、母と二人で生活していました。

○川野 お母さまと五日市のほうで生活されていたんですか。

○栗原 はい。

○川野 五日市のほうには、ご親戚か何かがいらっしやっただんですか。

○栗原 五日市のほうには何も親戚はいないんです。

○川野 お母さまも東京の出身だったんですか。

○栗原 はい。母の東京の家も 3 月の大空襲で焼けたので、もし、母の家があれば東京へ帰っていたと思うんですけどね。

- 川野 ああ、そういうことですか。
- 今中 では五日市から ABCC に通われていたわけですか。
- 栗原 そうです。
- 川野 どうやって通われていたんですか。
- 栗原 電車で通っていました。
- 川野 電車はもうありませんね。
- 栗原 ありました。己斐まで電車で行って、あとは市内電車に乗り換えて宇品まで行きました。だからずいぶんかかりますよね。
- 川野 そうですね。
- 栗原 凱旋館まで通いましたからね。そして、途中から ABCC が比治山に移りました。
- 川野 そうですか。同じく入市被爆者のご主人と、被爆当時に見たこととか聞いたこととか、あるいは原爆全体に関わることについて話をしていましたか。
- 栗原 いや、あまり主人とは話しませんでしたね。
- 川野 ご主人がお元気な頃、そういう話はされませんでしたか。
- 栗原 ええ、原爆については、あまり話しませんでしたね。
- 川野 それは、もう暗黙の了解で、話さないようにしておこうというような空気があったからですか。
- 栗原 そうですね。
- 川野 いまはどう思われていますか。もう少し話せばよかったなと思われませんか。もうそんなことは思われませんか。
- 栗原 そうですね。もう思いませんが、二度とこういうことがあってはいけないと思います。いまだったら、もっと大きい爆弾ですもんね。あの時はリトルボーイでしたけど。
- 川野 原爆でいろいろなことを経験されていますが、そういったことを外に向かってお話になりたいな、伝えなきゃいけないな、というような思いはおありになりますか。
- 栗原 そうですね。戦争というものを世界から無くしたいという思いはあります。

- 川野 『十九歳の夏』にも書かれていますよね。
- 栗原 そうですね。でもつらいですね。
- 川野 原爆と直接かかわることもないですが、『十九歳の夏』に妹さんの空襲ノイローゼについての記述がありましたね。当時、空襲ノイローゼというのは、よくあることだったんですか。
- 栗原 それはよく分からないのです。妹に限ってかもしれませんが、もう音を聞くと押し入れの中に入って出てこないんですよ。食事もしないし。
- 川野 空襲警報というのは、そんなに頻繁にあったんですか。
- 栗原 気持ちが悪い程です。頻繁でした。5日の晩も空襲警報がありました。
- 今中 6日の明け方も空襲警報があったはずですね。
- 栗原 そうですね。
- 今中 それで警報が解除されてどうされましたか。
- 栗原 空襲警報のあった日の晩は、お医者さんは近くの所、大手町小学校とか、手当をするために詰める所があるんですよ。父は夜はそこへ詰めて、朝方帰ってきていました。
- 川野 医師は広島市内から出ることができませんでしたからね。
- 栗原 はい。医者は疎開をすることはできないということだったので。
- 川野 そんなに空襲警報は多かったですか。
- 栗原 多かったですよ。
- 川野 でも、実際に爆弾が落ちるようなことはなかったですもんね。
- 栗原 ええ、広島に爆弾が落ちることはなかったです。
- 川野 7月25日に広島全土を撮った航空写真が数年前に出てきたんですが、広島の様子を非常にきれいに映しているんですよね。原爆を投下する準備をしっかりとやっていたんだろうというようなことをうかがわせるのですが、そういうことで空襲警報はよく鳴ったんでしょうね。
- 栗原 そうですね。よく鳴りました。
- 川野 私のほうからは以上ですが、先生、関連するようなことがあれば質問をどうぞ。
- 今中 ちょっとお聞きしておきたいのは、8月7日に最初に広島市内に入られ

ましたよね。

○栗原 はい。

○今中 それで、その時の市内は、まだ燃え残りやら何やらありましたか。

○栗原 ありました。

○今中 どんな感じでしたか。地面が熱かったとかはありましたか。

○栗原 革靴を履いていたんですけど、足の裏が熱いぐらいでした。そして、まだ燃え残りが少し燃えていたりしました。

○今中 歩かれたのは電車通りですよ。

○栗原 はい。

○今中 当時の電車通りは、舗装はあったんですか。

○栗原 舗装はあったんだと思いますけど、小さい道にはありませんでした。

○今中 小さい道はないですよ。ほとんど舗装はしていないはずですよ。

○栗原 そうですね。家に帰る時に小さい道に入っていきますからね。それから、家に着いた時も、あの当時は燃料がコークスでした。それが、まだ真っ赤になっていました。

○今中 では、そこらは焼け落ちて、まだくすぶっているような状況ですか。

○栗原 そうですね。

○今中 臭いとか煙とかはありましたか。

○栗原 ありましたね。死体はたくさんあったし、けが人もたくさんいました。

○今中 ただ、私が見た 8 月 7 日撮影の写真では、もうあっけらかんに焼けてしまっていて、ばあっと一面が焼け野原で、あまりもう物がなかったようなのですが。

○栗原 何もないですよ。

○今中 もう燃え終わったような感じで映っていたんですけど、やはり、まだくすぶっていたんですか。

○栗原 くすぶっている所があったんですね。

○川野 全体図を写した写真がありますけど、あれでは白黒だし、くすぶっているところがあるかどうかよく分からないんですよ。

○今中 次の日は完全に焼け落ちたのかなと思ったけど、そうでもないんです

ね。

○栗原 そうですね。

○川野 よくいろいろな人から、死体をいろいろな所で集めて焼いていたという話を聞くんです。この間、ある研究会に行ったら、旧広島一中の入市被爆者が「ガソリンをまいて焼いていたという話があるけれども、当時ガソリンなんかなかった」と言っていました。

○栗原 そうですね。

○今中 当時、ガソリンの入手は難しかったですよね。

○栗原 そうですね。

○川野 先ほどの臭いではないですが、そういった死体を焼く臭いはありましたか。

○栗原 死体を焼く臭いは漂ってきていました。

○川野 あちらこちらで死体を焼いている、そういう状況でしたか。

○栗原 ええ、集めては焼いていました。そして人間にはリンというのがあるんですよ。ぼおっと青いものです。

○今中 見られましたか。

○栗原 見たんです。死体は一人分ではないですもんね。たくさんの人を集めて焼くので見えたのかなと思ったりします。

○今中 リンは爆心地に近かったら放射能を帯びていますよ。³²P です。

○川野 リンが出るんですか。

○今中 放射線のリンです。だから救護活動で死体を触った人が病気になったとか、そんな話がありますよね。あれがもしあるとしたら、P の 32 が原因だと僕は踏んでいるんです。あれは半減期がちょっと長くて、2 週間あるんです。

○川野 そのあちこちのくすぶっていた火というのは、14 日に広島市内に出られた時には、だいぶ収まっていたか。

○栗原 収まっていました。

○今中 それは続いていないでしょうね。せいぜい続いても数日でしょう。

○川野 2、3 日ですよ。

○栗原 そうです。

○今中 せいぜい6日だから、7日はくすぶっていて、8日には火は収まっているのではないのでしょうか。いつごろまで燃えていたのか覚えておられますか。

○栗原 9日ぐらいまでは燃えていたのではないかと思います。

○今中 燃えたら何か漂うからね。

○栗原 はい。「本当にあるんだね。」ってみんな見たんです。

○川野 その情景というのが一番強烈ですか。一番強烈な原爆の風景って何ですか。

○栗原 赤ちゃんみたいな小さい子が焼け死んでいるのがかわいそうで、いまでも目に映りますね。防火用水の中に頭を突っ込んでいる人なんか、いまでも目に浮かびますね。

○川野 それを思い出されたり、夢に見られる頻度というのは、やはり先ほどおっしゃいましたけれども少なくなっていますか。

○栗原 はい、だんだん少なくなっています。

○川野 はっと思いついたりするようなことがありますか。

○栗原 いや、はっとするようなことはないです。

○川野 ある瞬間、はっと思いついて、体がわなわな震えたりというようなことはありますか。

○栗原 いえ、そういうことはないですね。

○栗原 防空壕を掘ったりしたのは関係ないですね。地下にも放射能の影響がありますか。

○今中 地面が放射能を浴びるわけですから、そこに保存してあった食べ物を掘られるとなると、地面や食料もある程度の放射能を帯びているはずですよ。ただ、お聞きしたらあまり食べられなかったということですが。

○栗原 ええ、食べられなかったんです。防空壕を掘っただけでそこにあった食料は何も食べられませんでした。

○今中 防空壕を掘ったことで皮膚とかに表面の土が付いて、そこが被曝するということはありませんか。

○栗原 そうですか。

○今中 私の共同研究者の一人になっている田中さんには、そういう、土が付いたら皮膚がどれぐらい被曝して、どれぐらいの被曝量になるかというような計算もやってもらったんです。一応、いまのところ彼の計算結果だったら、土が少し付いたぐらいでは、そんな大きな線量にはならないよというふうにはなっています。

○川野 でも、手で掘られたんでしょう。スコップとかはあったんですか。

○栗原 ええ、スコップとかはありました。留学生の人が、どこからか見つけてくるんですよ。

○等⁴ 今日、今中先生がいらっしゃって、入市後にたどった道だけを見ると、そんなに被曝の影響はないはずではないかと言っておられましたよね。それは納得できますか。

○栗原 いや、ちょっとあれかなと思いました（笑）。

○等 あれかなというのは。

○栗原 もっと被曝があったのではないかなと、残っていたのではないかなという思いはありますね。

○今中 そうですね。だから、ひょっとしたら私の計算のほうの間違っているということもありますので、それはまた、いろいろなことを考えて見直しをしていかなければいけないと思います。

○栗原 そうですね。

○等 いまは分からないことが多いじゃないですか。今後、そういう分からないこととかは、どうしてほしいなと思いますか。

○栗原 やはりきちんと分かりたいですよ。

○今中 明らかにすることができるものなら明らかにしたいのですが、できることと、できないことがありますから。やはり分からないことは分からないということもあると思います。どういうことが分からないよ、というかたちで整理しておきたいと思います。

○栗原 そうですね。でも、そんなに調べてくださる先生がいらっしゃいます

⁴ 同行したNHKディレクター。

のでうれしいです。

○一同 本日は本当にありがとうございました。

(終了)

佐々木陸子氏オーラル・ヒストリー

2009年12月5日実施

○川野 『平和を祈る人たちへ』の中に所収されている佐々木さんの手記を大変興味深く読ませていただきました。まず、そこに書かれている8月6日以後のことをまとめさせていただきます。佐々木さんは1933年2月8日のお生まれで、原爆投下時12歳、比治山女学院1年生でいらっしゃいましたね。

○佐々木 はい。

○川野 8月6日当日は比治山女学校の木造校舎内で被爆された。そこでの情景というのは、この『平和を祈る人たちへ』に詳しく書いてありました。原爆投下後、仁保の山中に一時的に避難されて、その後、南段原に帰られた。そして翌日の8月7日に宮島のおじさんの家に向かわれたのですね。

○佐々木 おじさんというのは、一番上の姉の嫁ぎ先の親戚のおじさんです。

○川野 その方が迎えに来られて、一緒に宮島のほうに向かわれるということですね。

○佐々木 はい。

○川野 8月7日は午後4時に自宅を出発され、いま中先生がご説明なさったような経路を歩かれて、夜中の12時に宮島口に到着された。非常に長い道のりを歩かれたわけですね。¹

○佐々木 はい。

○川野 いまの話のなかで何か誤り等がありますか。このとおりで、間違いはありませんか。

○佐々木 はい、間違いありません。

○川野 では、その後の話をお聞きしたいと思います。

まず、宮島でのことです。宮島に1週間滞在されておられますね。宮島の様子というのは、『平和を祈る人たちへ』にも若干書いてあるのですが、宮島滞在中に特に考えられたこと、思われたこと、そういったことがあればお教えいた

¹ 巻末資料参照。

だきたいと思います。いまだもって記憶に残っている宮島での出来事などがあれば、それもお教えいただきたいと思います。あるいは宮島滞在中に体の不調とか、そういうものがあれば聞かせて下さい。

○佐々木 宮島での1週間では、身体の不調はなかったんですね。

それで、宮島での滞在中でいまでも覚えていることとしては、死体が何体も流れてきました。

○川野 宮島まで流れてきたんですか。

○佐々木 ええ。山中女学校とか胸に書いてあって。海辺にいろいろな魚が群がって、いっぱい出て泳いでいるんですね。その魚の群れのすごさにびっくりしていて、よく見たら遺体がいっぱい流れているんです。あの宮島の栈橋までですよ。

○今中 宮島口から船で渡ったところにある栈橋ですよ。

○佐々木 ええ。おじさんが奥の栈橋の所有者だったので、そこへ何気なしに遊びに出たらそういう状況で、まあ何体流れているんだろうか、と思って数えようかと思ったら、大人の方が「子どもは邪魔になるからあっちへいきなさい」って言われて、すぐその場から離れました。

○川野 そんなに数えられないほど遺体が多かったですか。

○佐々木 ええ、だいぶ浮いて流れてきていましたよ。

○川野 そのご遺体はどうされたんですかね。

○佐々木 私たちはその場から逃げたから分からないけど、おそらく引き揚げで焼かれたと思うんです。

○川野 覚えていらっしゃるの、その山中女学校の名札の遺体ですか。

○佐々木 ええ、大きく胸に名札が張ってあったから。名前も書いてありました。名前は見なかったけど「山中高女」と書いてあったんです。

○今中 ではその遺体は市内から流れ出たんだね。

○佐々木 ええ、ずっと流れてきたんです。それも身体が2倍から3倍にパンパンに膨れ上がっていました。

○川野 そうでしょうね。

○佐々木 広島市内でも、川に浮いている人は全部2倍から3倍に膨れ上がっ

ていましたよね。

○川野 そういった情景というのは強烈に覚えていらっしゃるんですよね。

○佐々木 はい。

○川野 それが一番、いまでもって忘れられない宮島での情景の一つですか。

○佐々木 そうですね。宮島ではそのことが一番忘れられないですね。

○川野 『平和を祈る人たちへ』の中に「三日三晩、広島が真っ赤に燃え続けているのが、宮島からよく見えた」というようなことが書いてありましたが、そういったものをご覧になられてどのように思われましたか。

○佐々木 びっくりしました。よくあの中を歩いてきたな、通ってきたなと思って。福屋のほうは道幅が広がったから、そこは焼けていなくて、その周辺はみんな既に焼け落ちていたんです。くすぶるのはくすぶっていましたよ。だから紙屋町のほうは、その熱気で、もう息ができなくて、どうやって息をしようかと思って、ちょっと考えて口を開けたんですよ。そうしたら何とか息ができたから、口を開けて橋を渡ったんですよね。あの時は、まともに口をつむって息はできなかったです。あれが忘れられないですね。

○今中 やはり、まだ市内は熱かったですか。

○佐々木 熱いという感覚はなかったですね。

○川野 もう無我夢中だったということなんでしょうね。

○佐々木 ええ。

○今中 その息ができなかったというのは煙ですか。

○佐々木 煙でしょうね。その周辺を通るのに辺りが燃えているから、普通には息ができなかったです。

○川野 それは、紙屋町周辺を通られるときだけですか。

○佐々木 そうです。

○川野 己斐まで抜ければ、その状況は変わりましたか。

○佐々木 ええ。

○今中 己斐はそんなに燃えていないですよ。

○川野 燃えていないですね。結果的には、爆心地からほぼ 2 キロが焼けているんでしょうけど、焼け落ちるまでに時間がかかったかもしれませんね。佐々

木さんの場合は8月7日に宮島まで歩かれているんですよね。

○佐々木 はい、そうです。

○川野 その宮島まで歩かれる間、どんなことを考えられましたか。何も考えられなかったですか。

○佐々木 何も考えませんでした。ただ乗り物に乗せてもらおうと思って、トラックが通るたびに手を挙げたんですけど、けが人とかやけどの人をいっぱい荷台に乗せておられたのだらうと思うんですよ。実際に乗せていたかどうかは見えなかったけど。トラックを運転していた人は止まっては後ろを振り向いて、「ああ、いっぱいじゃけえどうにもならんわ」と言っただけで通り過ぎていきましたけどね。

○川野 それで結局、宮島まで歩かれたんですね。

○佐々木 ええ、結局歩いてしまったんですよね。

○川野 宮島に着かれた時には、どんなことを思われましたか。ホッとされましたか。

○佐々木 いいえ、ホッとしたということもなかったですね。宮島に着いて何時か見たら、ちょうど夜中の12時だったから。午後4時から歩いて、ですね。

○川野 宮島までの距離は20キロぐらいですかね。午後4時に出られて、相当歩かれたということですね。

○佐々木 そうですね。歩く時には何とも思わなかったけどね。

○川野 宮島滞在中の健康状態は如何でしたか。

○佐々木 どうもなかったんです。

○川野 その後、段原のご自宅に帰られて、両親、お二人のお姉さんと生活を再開されるということですね。

○佐々木 はい。姉が2人いたんですよね。一番上の姉は外務省に勤めていて北京かどこかにいました。

○川野 お姉さんとはだいぶ歳が違ったんですか。

○佐々木 私と姉は八つ違うんです。お兄さんと姉は七つ違うんですけどね。

○川野 ご兄妹で相当年が違うんですね。この『平和を祈る人たちへ』に書か

れた手記によると、段原のご自宅へ帰宅して 1 週間後くらいに、赤痢にかかったということです。

○佐々木 赤痢というのは私が自分で判断したんですよ。

○川野 そうなんですか。そういう診断を医者から下されたわけではないんですね。

○佐々木 ええ。もう血便と粘液だけの状態だったから、母が赤痢だと言っていました。

○川野 腹痛があって、血便があって、やせ細っていかれるということですね。お灸などの治療で 1 カ月後に回復ということでしたが、その内容をもう少し具体的に教えてください。

○佐々木 医者の奥さんとお孫さんが同じ隣組だったんですが、両方、私と同じ症状で先に亡くなられたんです。

○川野 その奥さんは赤痢だという診断が下って亡くなられたんですか。それとも、病名が分からないまま、佐々木さんと同じような症状が続いて、亡くなられたんですか。

○佐々木 そうです。はっきりした病名はついていないと思います。

○川野 その亡くなられた方は直接被爆者だったんですか。

○佐々木 そうです。みんな段原で原爆に遭われたんです。それで、とにかくハエの発生がひどかったものですから、食べ物を食べるときでもハエがいっぱいかってくるんですよ。

○川野 赤痢だろうとおっしゃったのは、お母さまがおっしゃったんですよ。

○佐々木 そうです。みんな、そう思っていたんです。近所で 7 人が私と同じ症状になったんですよ。

○川野 それはみんな赤痢だろうと判断されたんですね。

○佐々木 はい、同じ症状だったから。それで、私は母に梨が食べたいと言ったんです。でも売ってないから、前の大きい庭のある家に梨の木があったので、母がその家に梨をもらいにいったんです。そうしたら、その奥さんも同じような症状で苦しんでおられた。それで母が、赤痢だろうからとお灸を下ろしにやってあげたんですが、その下ろしてあげた 2 人が助かっただけです。あとは近

所の人はみんな亡くなられました。

○川野 その方々は、皆さんこの症状の原因は赤痢だと思っていたわけですね。

○佐々木 そうです。

○川野 それで、佐々木さんはお灸等の治療で 1 カ月後に回復されたと書かれていらっしゃるんですね。その血便であるとか腹痛というのは、どのぐらい続きましたか。

○佐々木 1 カ月ぐらい続いたのではないかなと思います。とにかく身体は骨と皮だけになって、さじが重たくて持てなかったんです。それで、もちろん立つこともできないわけです。母が立って後ろから支えてくれるのですが、ちょっと手を放したらバタンと倒れてしまいました。母は、これは立たせるのは無理だね、と言っていました。

○川野 そうですか。では 1 カ月後に回復された後には、もう下痢とか血便とか脱毛とか、そういった症状はなかったんですか。

○佐々木 ええ、痛みと同時にそういった症状は止まりました。

○川野 痛みが止まって、その後には徐々に体力も回復されてきたのですか。

○佐々木 ええ、初めは、ほうようにしてでしたが、赤ちゃんと一緒にですね。立つこともできなかったですね。それと湿疹が全身にできて、それがかゆくて。

○川野 どういう感じの湿疹でしたか。

○佐々木 小さいぶつぶつがいっぱいできる感じのものです。それで、かゆいからといってかいたら皮がずるっとむけて、水疱ですよ。皮膚の下が水で、それをふいてシッカロールをつけていましたけど、手や足なんかは靴下を脱ぐような感じで、皮がすうっとむけたんですよ。だから「頭先从から足の先まで皮がむけた」とどこかに書いていたでしょう。『平和を祈る人たちへ』には詳しく書いていないけど。

○川野 そのあたりの記述は、『平和を祈る人たちへ』の方にはないみたいですね。

○佐々木 はい。ただ頭の上から足の先まで皮がむけたというのは書いたと思うのですが、どうでしょうか。

○川野 そのあたりは、ちょっと記述が見当たらないです。それも、やはり被

爆から1カ月以内に起こったことですか。

○佐々木 そうです。

○川野 かゆかったですか。

○佐々木 ええ、かゆいからかいたら、ずるっと皮がむけて。

○川野 その後、皮膚はどういうふうになりましたか。

○佐々木 きれいになりました。その湿疹の下には水がたまっていたんですね。

○川野 シッカロールはご自宅のほうでお持ちだったんですね。

○佐々木 あったんですね。

○川野 ちょっと話が先に飛びますが、昭和22年の1月30日にお父さまが亡くなられていらっしゃいますよね。その時、お父さまはなぜ亡くなられたというふうに思われましたか。

○佐々木 胃癌です。

○川野 その時、なぜ亡くなられたのかというようなことを考えられましたか。

○佐々木 いえ、胃癌の大手術をしたんです。

○川野 あまり昔のことを思い出してつらいようなことがあれば、それはお答えにならなくて結構ですので遠慮なくおっしゃってください。

○佐々木 父が亡くなった時はつらかったものですから。

○川野 そうですよ。

○佐々木 母が片足を切断して一本足だったんですよ。それは前からです。私は5人きょうだいで一番末っ子なんです。それで、一番上の姉は五つか六つの時に亡くなって、実際には四人きょうだいなんですけど、何を言おうと思ったのかしら。

○川野 お父さまのことですね。

○佐々木 それで母のすぐ下の妹に子どもがいなくて、彼女は岡山にいたんですが、父が遊びに行った時に一人子供が欲しいと母の妹に言われて、父が私に「行かないか」ということで、私は「行く行く」と言って1年ぐらい母の妹のところに行ったんですよ。その間、父はすごく心配して、私は途中でやはり帰りたくなって、母は私を養子に出すのに反対して、絶対に私の籍を抜かなかつ

たんですよ。それで父はすごく私のことを気にしていました。父が入院したのはその後です。私が岡山へ行っている時に入院したんです。

父は以前に小学校の先生をしていたらしいんですよ。それで、その父の教え子が医者になられて、その先生に大手術をしてもらって、それはもう 5 時間か 6 時間かかって、ものすごく痛かったと言っていました。

○川野 そのお父さまの手術の時には、佐々木さんはもう岡山から帰っておられたんですか。

○佐々木 はい、夏休みに帰ってきていました。私ที่บ้านに帰りたいと言っていたから、父は陸子を誰か連れて帰ってくれと言って、何度も親戚に頼んでいたらしいですけどね。

○川野 分かりました。ちょっと話を先のほうに進めますが、1950 年ごろから ABCC で検査を受けられていますよね。

○佐々木 はい。

○川野 なぜ ABCC で検診を受けることになったんですか。

○佐々木 知らないです。向こうから車で迎えに来られて、送り迎えを勝手にされたんです。

○川野 嫌とか、そういったことはないわけですね。

○佐々木 こちらのことは関係なしで検査されました。

○川野 どういう様子で来ましたか。ジープに乗って、日本人の医者と外国人とが来ましたか。

○佐々木 いえ、ただ車が連れに来られただけです。

○今中 ハイヤーが向かえに来て比治山に行くんですよ。

○川野 そのまま車で比治山に連れて行かれたということですね。

○佐々木 はい。それでいろいろ検査されて、ここの上へ上がってみなさいと言われて、上がったたり下りたりしました。

○川野 では、佐々木さんのほうで行きたくないとか、そういったことはまったく言えるような感じではなかったわけですね。

○佐々木 そうです。病気で倒れた後のことですね。しかし、それがよくなった後も朝礼の時なんか何度も貧血を起こしていたんですよ。

○川野 学校に復学された後に検査されたんですね。

○佐々木 ええ。

○川野 1カ月段原のほうで静養されて、学校のほうにはいつ頃復学されましたか。

○佐々木 11月1日か12月1日かの『中国新聞』に、比治山の女学校は何日に登校しなさいと広報が出たんです。それまで全部休校だったんですね。

○川野 自宅待機だったわけですね。

○佐々木 はい。もうみんな家へ帰ったら家族全員が亡くなられたり、両親が亡くなっておられたりして、学生の半分は学校へ来ていなかったんですね。

○川野 では11月1日か12月1日に学校がまた再開して、それに合わせるかたちで、佐々木さんはまた学校のほうへ復学されたということですね。

○佐々木 ええ。その時にはまだよちよち歩きで、やっとの思いで学校に行きました。

○川野 その後も貧血とかで、バタッと倒れられたりということがあったんですか。

○佐々木 倒れるのではなくて、真っ青になって気分が悪くなって座り込んでいました。

○川野 それは頻繁にありましたか。

○佐々木 はい。やっぱりちょっと時間が経つと、すぐに貧血を起こしていました。

○川野 それは、復学してからずっと続きましたか。

○佐々木 続きましたね。

○川野 いつぐらいまで続かれましたか。

○佐々木 昔は朝礼がありましたから、朝礼の時はいつも貧血を起こしていました。

○川野 当時12歳でいらっしゃって、そのまま比治山女学校へ行かれるわけですね。

○佐々木 2年生の時に、約1年間岡山へ行っただんですね。原爆の後です。それからは、比治山へ戻ってきていますから。

- 川野 それで岡山から戻ってこられた後も、やはり貧血はありましたか。
- 佐々木 ええ、やはりずっとありましたね。
- 川野 女学院に進まれてからもありましたか。
- 佐々木 あったと思います。すぐに疲れやすくて。
- 川野 また ABCC のほうに話を戻しますが、ABCC のハイヤーが迎えに来て、そのまま ABCC に連れて行かれて、いろいろな検査を受けるわけですよね。そういったことに対して、どう思われましたか。
- 佐々木 べつに何とも思いませんでした（笑）。
- 川野 何とも思わなかったですか（笑）。
- 今中 ABCC は何かお土産をくれましたか。
- 佐々木 いいえ。
- 川野 何もくれないんですか。いろいろな人から話を聞くと、何かものをもらったという話をよく聞くんです。
- 今中 チョコレートとか何とかですね。
- 川野 せっけんとかシャンプーとかはもらっていないですか。
- 佐々木 いいえ、頭に残ってないです。
- 川野 そうですか。ABCC ではどういった検査をされましたか。
- 佐々木 高い所を上がったり下りたりとかですね。
- 川野 採血とかはされましたか。
- 佐々木 そこまで覚えていないのですが。
- 今中 佐々木さんの記録を見たところ、採血はしています。
- 佐々木 そうですか。
- 川野 ABCC には何回ぐらい行かれましたか。
- 佐々木 5、6 回ぐらいではないのですか。
- 川野 5、6 回の記録は全部あるんですか。
- 今中 何回あったかな。いま手元に資料がないのですが。
- 川野 その検査の結果というのは全然知らされなかったのですか。
- 佐々木 全然知らされませんでした。
- 川野 では ABCC に行かれたこともそうだし、検査の結果もまったく知らさ

れなかったわけですよ。そのことに対して、どうも思われなかったですか。

○佐々木 ええ（笑）。

○川野 もちろん占領下であるし、いわば、なすがままにされたのでしょうか。でも、ABCCの検査結果というのはまったく気にならなかったですか。

○佐々木 それよりも段原に倉敷からお医者さんが月に一度来られていたんですが、その時に自分の血を採って沈殿させて、それを2日注射していただきました。抜いた日と明るる日に2回ですね。それは1カ月に一度ほど、繰り返して何回か通いました。だからABCCの方はあまり覚えていません。

○川野 べつにABCCは佐々木さんの都合を聞いてやってくるわけではないでしょうからね。

○佐々木 そうです。

○川野 やってきて連れて行かれるということだったわけですね。

○佐々木 はい。

○川野 分かりました。『平和を祈る人たちへ』の中にも書かれていますけど、貧血が続いて体調不良が続かれたということですが、その後もいろいろな病気をされておられますね。69歳の時には胃癌・大腸癌・子宮癌にかかれたということですが。

○佐々木 それと、その時に一緒にパーキンソンの症状も出たんですよ。癌のために震えているのかと思ったら、胃癌を取ってもまだ震えているから、「これはパーキンソンじゃないんですか」とその病院の先生に言ったら、「うちはパーキンソンの専門じゃないから市民病院を紹介してあげます」と言って市民病院を紹介して下さったんですよ。

○今中 それはいつですか。

○佐々木 その時、69歳で、胃癌の手術をしたすぐ後です。入院している時に言われました。

○川野 69歳までの間に何か大きな病気にかかられましたか。

○佐々木 ある日、朝突然、トイレに行こうと思ったら嘔吐が激しくて、でもその嘔吐は空嘔吐だったことがありました。

○川野 それは、おいくつぐらいの時ですか。

- 佐々木 3番目の娘が二つぐらいの時ですかね。
- 川野 『平和を祈る人たちへ』へは、72歳の時に寄稿されていますね。
- 佐々木 はい。
- 川野 何年前ですかね。では69歳まで少し気になる症状というのは、嘔吐があったということですが。
- 佐々木 嘔吐がありましたね。とにかく動いたら、トイレに行くのでも、しばらく空嘔吐が続いて、やっとの思いでトイレに行くといった感じでした。とにかく病院に行けないんですよ。動けないので1週間我慢して、1週間目にやっと入院したんです。
- 川野 入院して、お医者さんには何と言われましたか。
- 佐々木 ちょっと記憶がないけど過労という診断だったろうと思うんです。2カ月くらい入院していて、血圧の上が100で、下がやっとなんて50になって退院したんです。血圧もすごく低かったんですよ。
- 川野 いま血圧はいかがですか。
- 佐々木 いまはちょっと上がり気味です。
- 川野 69歳の時には大きな病気もされて、そういった疾患、癌というのは、入市被爆の影響だというふうに当時は思われましたか。
- 佐々木 私は最初からそう思っています。
- 川野 いつ頃から思われていましたか。
- 佐々木 それは父が癌で亡くなっているからです。
- 川野 お父さまが亡くなられた時に、もうそのように思われましたか。
- 佐々木 はい。やっぱり入市被爆の影響だと思いましたね。
- 川野 次はすごく大きな質問で、ちょっとお答えしづらいのではないかなと思うのですが、思われるところを少しお話いただければと思います。佐々木さんは入市被爆をされているということですが、佐々木さんの人生は、原爆によってすごく大きく変わってしまった、という思いというのはおありですか。
- 佐々木 とにかく体が無理できなくなったのは確かですね。でも、子どもを4人授かりましたからよかったと思います。私は末っ子だったので妹が欲しかったんですよ。でも下がいなかったから、自分が結婚したら子どもをしっかり

つくろうと思っていて。

○川野 子どもをつくれる時に不安はありましたか。

○佐々木 全然ありませんでした。もう、うれしいばかりで。

○川野 でも、佐々木さんは先ほどおっしゃったように、入市被爆をして放射線の影響があるということを自分で思っただけじゃありませんでしたよね。

○佐々木 はい。でもその時には、もう。

○川野 その時は、もう放射線の影響についてはあまり思わなかったですか。

○佐々木 はい。思わなかったですね。

○川野 では、出産の時、あるいはその後、お子さんの健康に対して不安はありましたか。

○佐々木 あまり子どもの健康についての不安はなかったですね。まだ子どもを産んだときは、薬局は営業していなかったのかな。主人が薬剤師だったから安心していました。向原が主人の里なんですけど、そこで主人のお父さんとお母さんが薬屋をやっていたんです。それで主人は保健所に勤めていたけど、よくそこから薬を持って帰ってくれていたから。

○川野 ご主人は8月6日には向原にいらしたということですか。

○佐々木 向原にいました。

○川野 話が前後してしましますが。結婚される時にご主人は被爆者ではないわけですね。佐々木さんは被爆者でいらした。このことが結婚の妨げになるようなことはなかったですか。

○佐々木 全然なかったです。だけど友達は恐れて、いまだに自分が入市被爆者だということを言わない人もおられます。この間もクラス会があった時に「絶対に言わないでよ」と言ったんですけど、恐れて隠しているんです。

○川野 そういう方は多いですか。

○佐々木 割りかたの人がそうですね。

○川野 アメリカの占領が解け、アメリカ軍が帰り、原爆報道というのが比較的自由になるのが1952年頃からです。そして1954年には第五福竜丸の事故が起こるわけです。

それを境にある意味、広島・長崎に封じ込められていた原爆体験が、一般の

国民にも共有されていくわけです。それが、1952年、1954年なんですよ。その頃に結婚適齢期を向かえる方々というのは、結婚差別を受けられているケースが多いのです。

○佐々木 私たちは全然そういった意識がなかったです。

○川野 そういった意識というのは入市された方と、直接被爆者の方々という間には、何か違いがあるのでしょうか。

○佐々木 よくわかりません。私は入市被爆ではないですから。

○川野 被爆されたのは比治山ですね。比治山高等女学校は爆心地から3キロ、なおかつその後中心部へ入市されているということですね。

○佐々木 はい。

○川野 そういう被爆についてのことはあまり結婚の際には話に出なかったということですか。

○佐々木 向原にもいっぱいけが人とか、やけどの人がいましたから。

○川野 そういったけが人や火傷を負った人の様子は、ご主人もご覧になられているんですよ。

○佐々木 はい。だから、みんな隣組が当番で看病に出られたらしいです。まだ主人の一番下の弟が赤ちゃんの時に、主人のお母さんが弟を背負って当番で出て、その弟が亡くなったんですよ。

○川野 結婚の時にご主人は被爆のことについて何もおっしゃいませんでしたか。

○佐々木 何も言いませんでした。だから、原爆のことについて、主人の両親がよく知っていたのではないかと思うんです。

○川野 5年前に『朝日新聞』が被爆者4万人を対象に調査をしたことがあって、そのうち1万3,000人が回答をしたのですが、その2,700人ぐらいが何らかの差別を受けたことがあると回答し、そのうち2,000人弱が結婚時の差別を挙げているんです。だから、いろいろな差別はあるけれども、一番シビアなものというのが結婚時の差別なんですよ。それが1950年から1960年に集中しているんですよ。

○佐々木 そうですか。全然知らなかったです。どんな話があっても差別はな

かったです。だから気にしたことはなかったです。

○川野 そうですか。それは比治山のご友人とか女学院のご友人も同様に差別はありませんでしたか。

○佐々木 はい、彼女らも差別があったとも何とも思っていないでしょう。女専に行っておられて、東練兵で作業をしていて、やけどをした方が女学院にいられたんです。先ほど血液を採って、その日と明るる日に沈殿させて注射したと言いましたが、その人も一緒にそれを行っていたんです。その人もやけどをしておられたけれども、何も気にしておられなかったし、私もやけどで手のほうにも跡がありますけど結婚には支障はなかったです。

○川野 その方は結婚されましたか。

○佐々木 ええ。彼女はNHKの方と結婚されたのではないかなと思うのですが（笑）。

○川野 リベラルなNHKですから、きっとそういったことはなかったのでしょうか。

○佐々木 東大出の（笑）。

○川野 ははは（笑）。佐々木さんは直爆されて、その後に市内を回られたことで、一定の放射線量を被曝されているわけですが、そういったことが、その後の健康を害しただろうという思いはあるということでしたよね。

○佐々木 はい。

○川野 これも一言でいうのはとても難しいだろうと思うのですが、戦後の人生というのは佐々木さんにとっては幸せでしたか。

○佐々木 私は原爆ということで考えたことはないんですが。

○川野 原爆ということで考えられたことはないですか。

○佐々木 いまは考えていますけど。パーキンソンの症状も同時に出たから、私のこういった病状は原爆に関係があると市に言ったんですが、市からの返事が来ない。特別手当をもらう申請を2回して、1回はすぐに却下された。それで、この間もNHKの方に紹介されてすぐに市に申請を出したんですが、1年たっても返事が来ないので市に電話したんですよ。そうしたら、「あなたの場合には、まだ返事ができません」と言われました。

○川野 とにかくにも一生懸命に生きてきたというようなことを、『平和を祈る人たちへ』の最後にお書きになられていますね。

○佐々木 主人が早くに亡くなったから、そのことがつらかったです。主人が亡くなったときは、まだ一番下の子が1歳7カ月だったから。

○川野 それは大変でしたね。そのお子さんが、『平和を祈る人たちへ』に書かれている薬剤師の国家試験合格を目指している方ですね。

○佐々木 ふふふ（笑）。まだパスはしてくれないんです。

○川野 先ほどお答えを聞いたような気もするのですが、被爆者であるということに嫌な思いをされたことがありますか。

○佐々木 いえ、別に嫌な思いをしたことはないですね。周りがそういう被爆をした人が多いからではないですかね。

○川野 では被爆者であるというのを隠そうとも思わないですか。

○佐々木 思いません。

○川野 最後に、原爆に遭われて、その後、市内をずっと回って宮島まで行かれていると、いろいろな光景を目にされていると思いますけれども、いまだもって忘れられない光景というのはありますか。

○佐々木 目にした光景は、全部忘れられません。

○川野 日常のなかで思い出したり、夢のなかに出てくることがありますか。

○佐々木 そういのはあまりないですけど、やはり時々思い出します。

○川野 あの時の光景というのは、目に焼き付いていますか。

○佐々木 はい、目に焼き付いています。

○川野 日常のなかでは忘れるようなこともたくさんありますよね。でも、原爆のあの風景というのは忘れられないということですか。

○佐々木 はい、あの風景は忘れられません。

○川野 原爆当時のつらいお話であるとか、お父さまのお話、ご主人のお話とか、いろいろつらいことを思い出させてどうもすみませんでした。

○佐々木 いいえ。

○川野 こういった記録というのは、私は非常に重要だと思っているんです。原爆被害というのは、これで最後にしなければいけないというのは当然のこと

です。そういった被害の記録を残す、被爆者の方々の声を記録として残すというのは、われわれがしなければいけない非常に大きな責任です。

8月6日の情景、その後の急性放射線であるかもしれないいくつかの症状についてのお話、その後の人生のお話と、大変勉強になりました。貴重な時間をいただきましてありがとうございます。このお話は、しっかりテープ起こしをして、記録として残したいと思います。

○佐々木 私は、ここでよく一緒になる奥さんがおられるんです²。その方は一番下の息子と同級生のお母さんですけど、もう癌で命が危ないんです。彼女は原爆に遭っておられないのですが、彼女には特別手当が出ないほうがかえっていいなと、いまは思っています。

○川野 なぜですか。

○佐々木 もらえるものはもらいたいけど。

○今中 特別手当をもらうということは、癌になったということだからですよ。ね。

○川野 そういうことですか。

○佐々木 だから、そういう癌の症状でないと特別手当が出ないのなら、癌にならないほうがいいなと思って。本当に気の毒です。

○今中 私から一つだけ聞きたいのですが、佐々木さんの ABCC の記録を見ると、原爆の後、10月5日から脱毛があったと記録されています。何かこのへんのことは覚えていらっしゃいますか。

○佐々木 髪の毛が全部抜けはしなかったのですが、薄くなったのは覚えていません。

○今中 どんな感じで髪の毛が抜けたとか、その当時のことを覚えていらっしゃいますか。

○佐々木 くしで解かしてやると髪の毛が割るかた抜けていたから、薄くなっていたなと感じていました。

○今中 髪の毛が全部無くなるということではなかったということですか。

² インタビューを行った自宅近くの喫茶店。

○佐々木 そうではなかったんですね。

○川野 これは1949年11月29日実施のABCC調査票に基づいてお聞きしているのですが、当時もそういう風にお答えになられているんですね。

○今中 これはABCCのお医者さんが面接、聞き取り調査をして記録したものです。

○川野 脱毛の期間が3カ月というのは、脱毛の症状が3カ月間続いたということですか。

○今中 はい、3カ月間続いたということですよ。

○川野 10月5日頃から脱毛が始まって、その後3カ月ぐらい継続して髪の毛が抜け続けたということですか。

○佐々木 ちょっとはつきり覚えていません。もう川に死体が倍ぐらいに膨れ上がって何十体と浮いているのが目に焼き付いています。

○等 一つ伺いたかったのですが、先ほど、周りの方も被爆された方が多かったんで、そんなに被爆者であることを隠したりだとか、恥ずかしい思いはなかったとおっしゃってましたよね。それはクラス会とかに出た時も、被爆したこととかは素直にお互いに話し合ったりするのですか。それとも、あまりそういう被爆についてのことは話さないんですか。

○佐々木 あまり話さないですね。家族、両親が亡くなられた方で勉強が好きな人がいるのですが、学校に頼んで、校長先生が学校の寮へ入れて、無料で卒業させてもらった人が一人おられますね。だけど、そこまで勉強が好きではない方が何人かおられましたよね。

○等 あまり昔の話はしないですか。その被爆当時の話とかを、ほかの人と話をすることはしないですか。私もこうだったよとか、そういう話をお互いにしたりするんですか。

○佐々木 いえ、その人が言われたぐらいで、あまりしないですね。

○等 では、ほかの人がどうなったか、どう調子が悪いのかとか、そういうのはあまり分からないですよ。

○佐々木 やはり癌で亡くなっていますよね。あの方も今年亡くなられた、と言うぐらいですよ。

○川野 同窓会は毎年ありますか。

○佐々木 はい。クラス会、同期会です。

○川野 女学校と女学院のどちらのですか。

○佐々木 両方です。女学校のほうは4クラスあったんですが、被爆後は2クラスになりました。もう投下後は学校に来られないんですよ。家族やご両親が亡くなられて親戚の所に行ったりしていましたから。

○川野 学校に行くために必要な経済的な支援ができなくなるし。

○佐々木 はい。

○川野 そういったように親御さんが亡くなられて、授業料を出す人がいなくなって、やむを得ず学校をやめられた方というのは当時多かったですか。

○佐々木 はい、だから学校に通える人も半分になりましたよね。

○今中 原爆で亡くなられたのはどれぐらいですか。

○佐々木 私たちは現場に行かなかったからよかったです、その後、癌になられてぼつぼつ亡くなられましたね。

○等 結構、お友達も皆さん市内に入られたんですか。

○佐々木 それが多いですね。以前は今治からよく来られた方が、いまは癌を患って来られない人もおられます。去年亡くなられた方もおられます。

○川野 ちょっと話は違うのですが、佐々木さんは比治山を出られて女学院の専門部のほうへ行かれたんですよね。

○佐々木 はい。短大の専門部ですね。

○川野 その経済的な支援等はお母さまがなさったんですか。

○佐々木 はい、みんな母が一人でしてくれました。父は師範学校の先生をしていたんです。父は教育者なのに、女の先生は生意気だと言って、女は偉くなる必要はないと、私が専門部に行くことに反対だったんです。だけど一番上の姉が専門部へ行く時に両親が夫婦げんかになって、それに母が勝ったので、それから父はこのことを一切言わなくなって全員進学して行くようになった(笑)。

○川野 お母さま一人で学費を出すのは大変でしたね。

○佐々木 そうです。家が残っていたから、家は兵隊さんが雨漏りしないようにシートをばあっとかけられていて、全部シートで青天井でした。

- 川野 原爆で屋根が飛んだとおっしゃっていましたね。
- 佐々木 はい。それは兵器廠の兵隊さんだったから、窓ガラスを持ってきて、はめてくださったり、給食係の班長の方が家の部屋を三つほど強制的に取られたんですが、そのかわり食べ物には不自由しませんでした。
- 川野 それは戦後の話ですか。
- 佐々木 終戦直後です。しばらく残務整理におられましたね。
- 川野 食料はあったわけですね。
- 佐々木 はい。食料はそういう給食係の班長の方がおられたからありました。
- 川野 ちょっと話が戻りますが、宮島のご親戚の家での食糧事情というのはどうでしたか。
- 佐々木 宮島での食糧のことについては、頭に残っていないんですが。
- 川野 頭に残っていないということは、おそらく食べられたんでしょうね。
- 佐々木 はい。私たちのときには戦時中ですし、麦が7でお米3が1週間に1回食べられたらありがたかったですね。あとは雑炊と団子汁、そればかりです。いつになったらご飯が食べられるのかなと思っていましたね。
- 川野 戦後、白いご飯が食べられるようになったのは、いつごろでしたか。
- 佐々木 いつごろだったか覚えていないですね（笑）。
- 川野 しばらくは配給でしたよね。
- 佐々木 はい。パンの配給があったりしましたね。
- 今中 私が物心ついた時は、みんな米を食べていたよ。
- 川野 そうですよ（笑）。
- 一同 ははは（笑）。
- 今中 私が昭和25年生まれだから、昭和30年ぐらいには白いご飯が手に入るようになったのかな。もちろん麦飯もあったけど。
- 佐々木 麦が7でお米が3でも当時はありがたかったんですよ。
- 川野 さすがに今中先生は、麦飯は食べていないんでしょう。
- 今中 私は麦飯は食べていないけど。
- 佐々木 とにかく団子汁が多かったですね。だから、そのへんの草を採って団子汁と一緒に入れたり。

○今中 以前、広島戦後のまちの写真集があって、それを見たら、昭和25年、30年ごろの広島市内の様子というのは、いま見たら全然違って、木造バラックがわあっと並んでいて、実に懐かしくなるような様子でした（笑）。

○川野 『広島市今昔写真帖』という写真集があるんですよ。5年おきぐらいに広島の様子をずっと撮った写真があって、すごく興味深かったです。本通りなんかの変遷がよく分かるんですよ。

○今中 いまの若い人たちが見たら、これはどこかのスラム街か、というように見えるでしょうね（笑）。

○佐々木 それで的場から段原が何年かかかって順番に立ち退きになったんですよね。それを私は写真に撮りました。

○今中 段原の辺りは戦争でつぶれていなかったから、道がどうなっているか分からない。

○佐々木 だから170何坪あったのが150坪になって。

○川野 段原のご自宅は、その立ち退きの後、どうされたんですか。

○佐々木 姉が取っています。

○今中 では、いまでもご実家は段原にあるわけですか。

○佐々木 はい。立ち退きになったから、建物は立て直していますが。

○川野 では、まだ段原にお姉さまは住んでいらっしゃるんですか。

○佐々木 ええ、すぐ上の姉が住んでいます。

○今中 では、ぼちぼち終わりますでしょうか。

○川野 はい。本日は長い時間、本当にありがとうございました。

○佐々木 ありがとうございました。

(終了)

広島原爆早期入市者の疾病記録と 誘導放射能による被曝量の評価

(京大原子炉、広島大院工¹、広島大平和科学研究センター²、札幌医大³)

○今中哲二、遠藤暁¹、川野徳幸²、田中憲一³

1. はじめに

広島・長崎の原爆被災者が受けた放射線は、『初期放射線』と『残留放射線』に分類される[1]。『初期放射線』には、爆発の瞬間に放出される‘即発放射線’、ならびに上昇する火球中の核分裂生成物から放出される‘遅発放射線’が含まれ、その被曝が問題となる時間域は、原爆炸裂時から、火球が上昇して地表への影響が無視できるようになる約 20 秒後までである。『残留放射線』には、原爆中性子によって爆心地周辺の土壌などが放射化されることにともなう‘誘導放射線’と、いったん上空にあがった核分裂生成物等が、いわゆる黒い雨などとともにより地表に降下したことによる‘フォールアウト放射線’とがある。広島・長崎原爆の初期放射線による被曝については、DS02 と呼ばれる個人線量評価体系が策定され、放射線影響研究所 (RERF) で実施されている被爆生存者追跡疫学研究 (LSS 調査) での個人線量評価に適用されている[2]。LSS 調査では、その調査集団の大部分において、残留放射線の寄与は初期放射線に比べて無視できるものとされ、個人線量の評価において残留放射線は考慮されていない。

一方、原爆投下の後に広島・長崎に入市した人々や黒い雨をあびた人々の間で放射線被曝との関連を思わせるようなさまざまな症状が現れたことは広く知られている[3]。我々のグループは、日米合同 WG のメンバーとして DS02 策定の作業が終了した後、残留放射線量評価の取り組みを続けている[4,5]。誘導放射線による被曝については、DS02 での中性子束計算の延長として、土壌中放射化核種からの放射線線量率を、爆心からの距離ならびに原爆炸裂からの時間の関数として計算した[6,7]。さらに、早期入市者の行動記録をセル入力すると積算外

部被曝を求めることができる簡易 Excel ツール InDose07.xls を開発し公開してきた[8,9]。本報告では、InDose07.xls の広島原爆早期入市者への適用例を紹介する。

2. 誘導放射線量計算と簡易 Excel ツール

図1は、地上1mでの誘導放射線率の時間変化、図2は、爆発直後から無限時間にわたる誘導放射線量の積算値を、初期放射線量と比較したものである。図2から、初期放射線に被曝した人が誘導放射線を受けたとしても、初期放射線量に比べ無視できると言ってもよいであろう。一方、爆心地へ原爆直後に入市した人がそこにずっととどまるとすれば、1Gy 近くの外部被曝となることも計算上はあり得ると言えよう。図3は、早期入市者積算線量を計算する InDose07 のインプット例である。この仮想例では、広島原爆の爆発40分後の午前9時に2km以内に入り、10時40分に爆心付近に到達して2時間滞在した後、14時20分に2km外へ出たとし、積算外部被曝は78.6mGyとなっている。

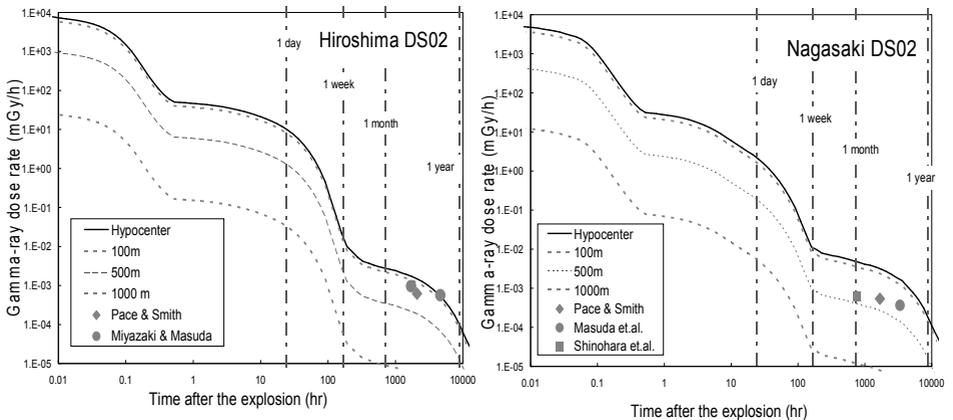


図1 誘導放射能による地表1mでの放射線量率の時間変化

爆心地からの距離別。Pace & Smith、Miyazaki & Masuda、Shinohara は測定値。

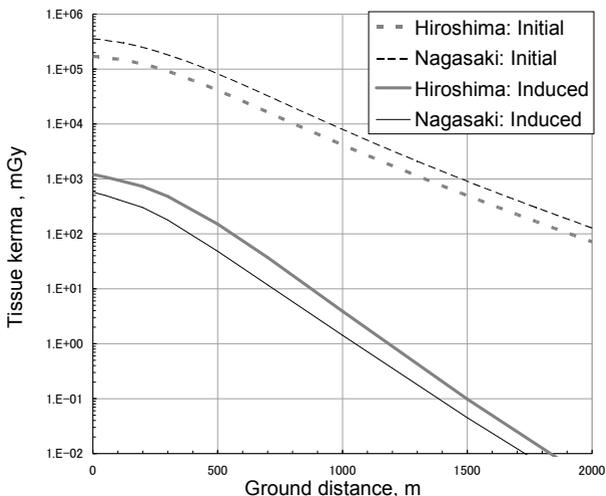


図2 爆発直後から無限時間までの積算の誘導放射線量と初期放射線量
横軸は爆心地からの距離。

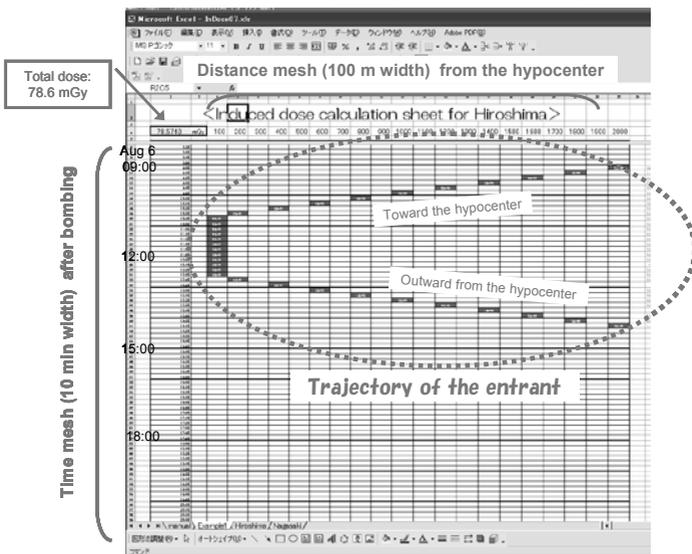


図3 誘導放射線個人線量計算ツール InDode07.xls.

セルの位置は(時刻、爆心地距離)に対応し、セル内の値はその距離に10分間居たときの被曝量。行動軌跡に対応するセルを色づけし、マクロで被曝量を積算する。

3. 早期入市者の行動聞き取り調査

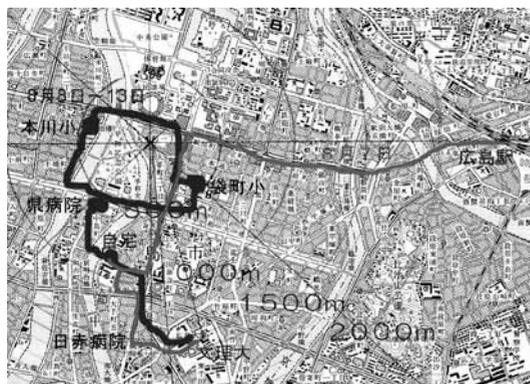
2008年8月6日、『見過ごされた被爆～残留放射線・63年後の真実～』というNHKスペシャルで、広島原爆後に早期入市し体調を崩した人の証言や、急性放射線障害を思わせる症状についてABCC (RERFの前身) による聞き取り調査記録が残っていることが放映された。そのNHKスペシャルを制作したディレクターの協力を得て、RERFに記録が残っている早期入市者2名(AとB)と面談し、原爆当時の行動についての聞き取りを行った。また、急性症状を思わせる体験のなかった早期入市者2名(CとD)についても同様の聞き取りを実施した。面談を行ったのは、2009年5月から6月にかけてであった。

◇ Aさん(症状有り、女性)：原爆投下時は19歳で、郊外約5kmの工場で学徒動員中。8月7日に爆心から900mの自宅へ。それから一週間家族を捜して爆心近辺の救護所など市内を歩き回った。この間、1.4kmの文理大グラウンドに野営。14日に郊外へ疎開して発病。表1にABCC調査票からの抜粋、図4は面談で得られたAさんの当時の行動である。

表1 AさんのABCC調査票より (1954年3月29日記録)

	発症日	程度					期間
		軽度	中等	強度	不明	無	
発熱	1週間後			✓			1週間 8/13-8/20
全身倦怠	1週間後			✓			1ヵ月 8/13-9/13
嘔吐						✓	
悪心						✓	
食欲不振	数日後		✓				約3週間 8/8-8/30
下痢(非血性)	1週間後			✓			約10日 8/13-8/23
下痢(血性)					✓		?
口内痛	1週間後			✓			約1週間 8/13-8/20
咽喉痛	1週間後			✓			約1週間 8/13-8/20
歯肉痛	1ヵ月後			✓			約2週間 9/6-9/20
歯齦出血	1ヵ月後			✓			約2週間 9/6-9/20 (化膿有り)
斑点出血						✓	
その他の出血						✓	
脱毛	1ヵ月後	✓					約2週間 30-35%

・ 一般的な健康状態としては、疲れやすく、貧血気味。・ 聞き取りの信頼度は good.



<8月7日>			<8月8日~13日>		
時刻	場所	距離、m	時刻	場所	距離、m
10:00	広島駅	2200	0:00	文理大	1400
10:20	大正橋	2000	8:00	文理大	1400
11:00	稲荷橋	1400	9:00	大手町7丁目	900
12:00	紙屋町	200	12:00	泉病院	700
13:00	白神社	500	14:00	袋町小	500
14:00	大手町7丁目	900	16:00	本川小	400
15:00	"	900	18:00	文理大	1400
16:00	日赤	1400	24:00	"	1400
18:00	文理大	1400			
24:00	"	1400			

図4 Aさんの行動経路とIndose07のインプット情報

◇ Bさん(症状有り、女性)：原爆投下時は12歳で3.1kmの女学校で被爆。無遮蔽野外の初期線量は1.5mGy。8月7日午後4時頃に比治山裏の自宅を出发。市内を東から西に電車通りを徒歩で横断。己斐を経て夜中の12時に宮島口に到着。叔父宅に一週間滞在したのち帰宅。帰宅後、周期的な腹痛、血便、やせ細るが1カ月後に回復。表2はBさんのABCC調査票抜粋、図4は行動軌跡である。

表2 BさんのABCC調査票より (1949年11月29日の記録と思われる)

	発症日	程度					期間
		軽度	中等	強度	不明	無	
発熱						✓	
全身倦怠	9月12日	✓					1と1/2ヵ月
嘔吐	9月12日			✓			20日間
悪心	9月12日			✓			20日間
食欲不振	9月12日		✓				
下痢(非血性)	9月12日			✓			1と1/3ヵ月
下痢(血性)	9月12日			✓			1ヵ月
口内痛						✓	
咽喉痛						✓	
歯肉痛						✓	
歯齦出血						✓	
斑点出血						✓	
その他の出血					✓		
脱毛	10月5日頃		✓				3ヵ月



時刻	位置	爆心距離m
8月7日		
16:00	南段原出発	2300
16:20	大正橋	2000
16:30	的場	1800
17:00	八丁堀	800
17:20	紙屋町	300
17:30	原爆ドーム前	100
17:40	相生橋	300
18:00	十日市	800
18:20	土橋	800
19:00	己斐駅	2000

図5 Bさんの行動経路(8月7日)とIndose07のインプット情報

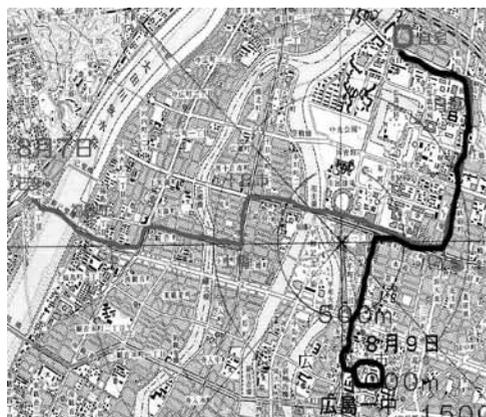
- ◇ Cさん(症状なし、女性): 原爆投下時は21歳で、3.5kmの山陰の自宅で被爆し、初期線量はゼロ。肉親捜しのため8月6日と7日の両日入市。図6に行動経路とインプット情報。



<8月6日>			<8月7日>		
時刻	場所	距離_m	時刻	場所	距離_m
10:00	江波出発	3500	11:00	江波出発	3500
10:30	舟入2丁目	2000	11:30	舟入	2000
11:00	河原町	1000	12:00	舟入中	1000
11:30	本川小学校	400	12:20	土橋	800
13:30	"	400	12:30	天満橋	1000
14:00	河原町	1000	13:00	天満橋	1000
14:30	舟入2丁目	2000	13:20	土橋	800
15:00	江波帰宅	3500	14:00	舟入中	1000
			15:00	舟入	2000
			16:00	江波帰宅	3500

図6 Cさんの行動経路(8月6日と7日)とIndose07のインプット情報

- ◇ Dさん(症状なし、男性): 原爆投下時は14歳(中学2年)で、広島市郊外(西10km)の工場で学徒動員中。当日は自宅に帰れず、7日に爆心近くを通過して1.4kmの自宅跡へ。8日は肉親疎開の郊外へ出かけ、9日は爆心近くを通過して中学の様子を見に行った。図7に行動経路を示す。



<8月7日>			<8月9日>		
時刻	場所	距離、m	時刻	場所	距離、m
12:00	己斐駅	2500	8:00	自宅	1400
12:20	福島町	2000	9:00	八丁堀	800
12:40	土橋	800	10:00	紙屋町	300
13:00	十日市	800	11:00	一中	900
13:30	紙屋町	300	15:00	一中	900
14:00	八丁堀	800	16:00	紙屋町	300
14:40	白島	1400	17:00	八丁堀	800
15:00	自宅	1400	18:00	自宅	1400
17:00	可部へ	2000			

図7 Dさんの行動経路(8月7日と9日)とIndose07のインプット情報

4. 外部被曝計算結果と考察

InDose07 を用いた誘導放射線外部被曝の計算結果を表3に示す。最も被曝量が大きかったのは、症状のなかったCさんで約24mGyである。Cさんは、原爆当日、爆心地から500mの病院に入院していた肉親を捜すため、爆心附近に数時間滞在したことが主な被曝原因である。

ABCCの面接調査で急性放射線障害に類似した症状の記録のあるAさん、Bさんの被曝は9.4 mGyと2.6 mGyであり、放射線影響に関する‘常識’では急性放射線障害を起こすような被曝量ではない。ABCCの面接記録と我々の被曝量評価を矛盾なく説明するための仮説として、以下の3つを考えている。

- I. ABCC面接記録にある症状は、放射線被曝とは無関係で、他の要因による疾病である。
- II. InDose07で求めた被曝量は実際の被曝を大きく過小評価している。たとえば、放射化量計算に用いた土壌組成が不適当であるとか、本報告で考慮していない内部被曝の寄与が大きかった。
- III. 原爆被曝という極限的な状況下では、放射線被曝の影響が他の影響と相乗的に作用し、閾値が大きく下がって急性放射線障害のような疾病が観察された。

Ⅱの内部被曝の寄与については、文献6で、原爆ガレキ片付け作業の模擬実験で得られた空气中塵埃濃度 $2\text{mg}/\text{m}^3$ を基に誘導放射能内部被曝を計算してみたところ $0.06\ \mu\text{Sv}$ となり、誘導放射能の吸入にともなう内部被曝は外部被曝に比べ無視できる値となった。黒い雨については、今回評価した4名はいずれも遭遇していない。ⅠとⅢの仮説については、我々の側から積極的な検証作業はできず、open questionと考えている。

表3 InDose07を用いた誘導放射線外部被曝計算結果

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
症状の有無	有り	有り	無し	無し
入市の日	8月7日～13日	8月7日	8月6日、7日	8月7日、9日
	5.5 (7日) +		23.5 (6日) +	3.0 (7日) +
外部被曝量	3.9 (8～13日) =9.4 mGy	2.6 mGy	0.2 (7日) =23.7 mGy	1.0 (9日) =4.0 mGy

早期入市者が経験した疾病について以下の情報を追加しておく。表4は、NHK関係者が米国科学アカデミーのABCCアーカイブから入手した1952.7.14付けと1953.10.13付け報告からの抜粋である[10,11]。2009年6月に今中らは文献11の報告者である玉垣秀也医師と面談したが『放射線障害としか考えられないような症例を複数経験した』とのことであった。また、原爆当時医学生で、広島に早期入市して救護活動に従事した門田可宗医師は、自らの出血斑の体験について詳細な手記を残している[12]。

表4 米国科学アカデミーABCCアーカイブからの抜粋

No	行動履歴 (時間×距離)						症状						死亡日	情報源 (*信頼度低)	
	8月6日	8月7日	8月8日	8月9日	8月10日	以降	血性下痢	齒齦出血	出血斑 紫斑	脱毛					
										程度	発症日	期間			
1	6×1000						?	中	中		1/2	9月15日	?		
2	4×1200	24×1200	10×1200			8/14-16 1200	強								
3		10×1000					?		軽	2/3	9月20日	60日			
4										1/2	9月30日	7日			
5	2×2000	5×1000	5×1000	5×1000	5×1000	8/11-12 5×1000				2/3	9月1日	30日			
6		8×1300	24×1300	24×1300	14×1300		中	軽		2/3	46年2月	?			
7		7×1000 3×1700					軽		中	1/2	8月17日	90日			
8		20×2100	7×100 17×2200	7×1300 17×2200	8×1500 16×2200	8/11 15×2200		強	中	2/3	8月27日	?			
9			2×900 5×1500 3×2200	2×900 5×1500 3×2200	2×900 5×1500 3×2200	8/11-14 同じ									
10					6×500	8/11-16 同じ			軽?						
11		3×1000 8×1-300 0	12×1000						軽						
12						8/24 11×600	中		中	2/3	9月1日?				
13	8月7~14日 毎日						強	中	強	中	9月半ば	?	'45.10.2	妻	
14	8月7日、8日 終日						無?	中	無?	中	'46年5月		'46.6.28 肺炎	息子*	
15		15×800	24×800	24×800	24×800	8/11-14 同じ				?					
16		12×2500	24×2500	24×2500	16×2500	8/17-22 同 じ									
17	8月15日~17日						中	無?	中	?				'45.12.6 ガン	妻
18		10×800	10×800	10×800	10×800	8/11-13 同 じ				中	8月30日	2 年?			
19		12×1000	8×2000												
20	5×1500	24×1200	6×1200 10×200				軽?		中	軽	8月25日	2-3 ヵ月			
21	8月10日~16日 (爆心)						無	中	中	中	?	?		'45.11.6	母
22					15×1000	8/11-15 11×1000 12×800	軽		中	中	9月5日	?			
23	8月7日~13日						無	軽	中	無				'46.1.24	父*
24	8月8~9日						?	?	?	?				'46.5.23	息子*
25		6×2500	3×1000 21×2500	24×2500	24×2500	8/11-14 24×2500 (6×800 1日)	軽?	軽	中						

- [1] 今中哲二、第43回京大原子炉学術講演会報文集、15-20、2009.
- [2] Young R, Kerr G ed. Dosimetry System 2002. <http://www.rerf.jp/library/archives/scids.html>
- [3] 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編. 広島・長崎の原爆災害、岩波書店、1979
- [4] 広島“黒い雨研究会”中間報告 2010
<http://city.youth-service.com/01publication/0301BlackRain2010.pdf>
- [5] Aoyama and Oochi ed. HiSoF Report <http://city.youth-service.com/0100publication.html>
- [6] 今中哲二、KURRI-KR-114, 2005.
http://hlweb.rri.kyoto-u.ac.jp/shibata-lab/DS02/Final_pdf/Imanaka-2.pdf
- [7] T. Imanaka et al, Radiation and Environmental Biophysics. 47: 331-336 (2008).
- [8] InDose07(暫定版)使用方法 2007
<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/sonota/0801/InDoseDocs.pdf>
- [9] T. Imanaka et al. Radiation Protection Dosimetry, 2011 doi:10.1093/rpd/ncr370
- [10] Report from McDonald to Taylor/Reynolds,
<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/reports/14-7-1952.pdf>
- [11] Report from Tamagaki to Research Committee,
<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/reports/13-10-1953.pdf>
- [12] Monden Y., <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/reports/A724-A732Monden.pdf>

Medical Questionnaires of Early Entrants after the Hiroshima Bombing and Their Radiation Exposure Due to Neutron-induced Radioactivity.

T. Imanaka, S. Endo, N. Kawano and K. Tanaka

imanaka@rri.kyoto-u.ac.jp

© 2013 : 広島大学平和科学研究センター
730-0053 広島市中区東千田町1-1-89
TEL : 082-542-6975
FAX : 082-245-0585
E_mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.sc.jp/heiwa/>